

大塚 悠生さん

北海道新篠津村
有限会社大塚ファーム 専務取締役

地域資源循環で日本農業の未来を拓く 3兄弟で北海道随一の有機栽培継承へ

札幌近郊の米麦地帯で20年前、現社長の
大塚裕樹さんが始めた大塚ファームの有機農業は、日本農業賞個別経営の部で大賞を受賞するなど北海道を代表するまでに成長した。今、3人の息子たちが3年後の代替わりに向け次の飛躍に向けた準備を進めている。長男の悠生さんは、有機農業にとどまらず、地域資源の循環の中に未来の農業があると語る。

小学生の頃から後継を意識

——ロゴマークは、兄弟3人が手をつなぐイメージです。農業を継ぐことが重荷にならなかったですか。

大塚 10年前に初めてロゴを見たときにも違和感はなかったですね。すでに小学校6年生の時に経営を引き継ぐと決めていました。将来の経営

にとって何が必要かと考え農業高校に進学し、卒業して種苗メーカーの園芸専門学校で2年間学びました。どうすれば有機農業を柱にした農業経営を発展させることができるのかを考え続け就農しました。弟たちも同じで、農機メーカーに就職したり、オーストラリアの農場で働いたりしながら大塚ファームの未来を担う準備を進めています。迷いはありませんでした。

——農業を継ぎたいと考えたきっかけは何ですか。

大塚 2014年に日本農業賞の個別経営の部で大塚ファームが大賞を受賞し、同年の農林水産祭では両親が日本農林漁業振興会会長賞を受賞しました。農業アレルギーをきっかけにして、失敗を繰り返しながらも

野菜で有機農業に挑戦し、農業経営を発展させた点が評価されました。授賞式典には私たち兄弟も同行し、壇上で農業への思いを語る両親を見て、シンブルに「カッコいいな」と感じました。小学校6年生の卒業文集の中で「僕は農林水産祭で両親が逃した天皇杯を獲る」と夢を書きました。その頃から両親の経営を超えるところに未来のゴールを描いていました。農業を継ぐことは当たり前だったのです。

——高校時代に有機農業の可能性を論じて表彰されています。

大塚 高校3年生の時に、公益財団法人セディア財団の「高校生が描く『明日の農業コンテスト』」で最優秀賞をもらいました。「有機農業の可能性」未来に繋ぐ「農業人育成」をテー



マにレポートを作成し評価されました。欧州などに比べて見劣りする日本の有機農業を発展させるためには人材の育成が大切です。日本全体で有機農業を広げるために、大塚ファームが自社のことだけでなく、技術開発や教育の役割まで担いたいと主張しました。

そのために3兄弟で協力して大塚ファームを日本一の有機農家に成長させて、さらに30年後にはアジアで1番になることを目指すと宣言しました。

親を超えアジア1番の農家へ

——アジア1番ですか。それはまた大きく出ましたね。

大塚 笑っちゃうような話かもしれませんが、真剣でしたよ。その時点で



有限会社大塚ファーム専務取締役の大塚悠生さん＝新篠津村のミニトマトハウスにて

両親がすでに有機農業で全国表彰されていたので、それを超えた有機農業をしたいと考え「アジアを代表するオーガニック・ファーマーになる」と。1番の定義までは深く考えなかったのですが、響きが良くて夢として分かりやすいでしょう。

間違えてはしくないのは、単に規模が大きい有機農家を目指したわけではありません。

有機農業で大切なのは、地域の資源を循環させた「持続可能な食料システム」だと考えます。有機認証を取

るために化学肥料や化学農薬を使わないのは手段の一つです。

「有機野菜は販売上有利」という側面があることは間違いないですが、本質は違います。

——持続可能な地域資源の循環が大切ですか。

大塚 そうです。今の農業はあまりに外部資源に依存し過ぎています。肥料や農薬、飼料、燃料、資材類の多くが遠く海外から運ばれるのが当たり前。ひとたび海外情勢の影響などで輸入原料由来の生産資材価格が高

騰すると農業への打撃は大きいです。資源の外部依存という根っこを変えないまま「有機農業をやるう」と言うのはおかしい。まず、日本の農業が足元の資源をもっと活用する方向に転換することが大切で、その原動力の一つが有機農業だと考えています。

例えば、近くにある北海道三笠市は、企業や家庭から発生する生ごみを分別、回収して、ぼかし肥料やペレット肥料にしています。私たちの農場でも使用していますが、人口7000人ほどの三笠市が排出する

生ごみの半分を大塚ファーム1社で引き受けている計算です。自治体にとつてはただのごみかもしれませんが、適切に処理すれば農業にとつて大切な資源にできます。その他にも鶏ふん、馬ふん、使わなくなったピートモスなども肥料にして使っています。

地域にあるさまざまな資源を肥料にする。それを農業でしっかりと使うことが基本です。長い目で見ると、それが役立ちます。

以前、畑の土を精密に検査したことがあります。父が有機栽培で長年土作りをしてきたのでCEC(陽イオン交換容量)の値が非常に高くなっていました。言い換えると土の中に腐植が多く土壌が養分をため込めるキャパシティが大きい状態です。害を与える線虫や病害菌もいるのですが、土壌が豊かなので作物が跳ね返して発病しません。これは、化学農業に頼らない栽培が可能な理由の一つでしょう。

説得力求めて規模拡大進める

有機農業や地域資源の活用を全

日本全国でこうした地域資源循環型の持続可能な食料システムモデルを広げていきたい。そのために大塚ファームが存在する。これが、私が描いているミッションです。

Profile
おおつか ゆうき
北海道石狩郡新篠津村出身の24歳。北海道岩見沢農業高等学校を卒業後、2年間、滋賀県にある種苗メーカーの専門学校で学ぶ。その後、国内外の先進農家で研修や視察を重ね、実家の大塚ファームで就農。3兄弟の長男。今年、専務から専務に昇格し、経営全般の舵取りを担う。

Data
大塚ファーム
1913年に悠生さんの高祖父が現在の土地に入植し、現社長の太塚裕樹さんで4代目となる農業経営体。73年に法人化し、2012年に現在の社名に変更。経営の柱は60棟あるミニトマトの施設栽培で、他にサツマイモなども栽培し、干し芋などの加工品の製造・販売も行。水稲など一部の品目を除く大半が有機栽培。経営面積は29ha。14年に日本農業賞個別経営の部で大賞を受賞するなど、受賞歴多数。年間売上高は2億5000万円。

国に広げるために何をするのですか。
大塚 私たちが今の経営で結果を出さないと言った方がいいですね。有機農業でも大規模な経営を実践できることを実証します。そのために売上規模をできるだけ増やしていく計画です。

会社の売上高は現在2億5000万円ですが、20年前はその10分の1に過ぎませんでした。この辺りの農業は米と麦を栽培するのが普通です。農家にとって安定した収入にはなりませんが、大きく成長することは難しいです。

社長である父は、有機野菜を取り入れたり、加工を始めたたりしながら単位面積当たりの売上高を大きく伸ばしました。人を雇い、会社としての仕組みも整えてきました。

私は父の挑戦を引き継ぎ、さらに加速させます。父からは「3年後には社長にする」と言われています。今は海外などで研修している弟たちとも協力し、2040年までに売上高20億円を目指します。利益もきちんと出せるようにしたいです。

そのため、野菜のハウスを毎年5から10棟ほど建てています。今は60棟で、30年までには100棟にする計画です。

また今年、新規事業としてイチゴ

の有機栽培を始めました。収穫した果実はイチゴソースに加工して菓子メーカーに販売する計画です。販売先の企業とはイチゴを作る前から商談をしていました。

——今の場所で規模を大きくするのはですか。

大塚 拡大する農地は地元でこれありません。ここは農業の適地で農家は跡継ぎがしっかりと確保されているので、まとまった農地はなかなか出てこないでしょう。そのため、あまり遠くない場所で第2、第3農場になりそうな所を探しています。

現在は、品目ごとのマネジャーや統括する農場長などの役割が決まっています。それぞれが自分の判断で作業を進められるようになってきました。人材育成がさらに進めば、別の所に農場を構えたとしても十分に回っていくはずですよ。

さらに、社員が栽培技術だけではなく、加工、経営、労務管理などのスキルを身につけられるような仕組みづくりが大切です。そのノウハウを基にして、有機農業に取り組む人たちへの支援やコンサルタント事業、地域資源の循環に役立つ肥料ビジネスなどにも進出したいです。単純に農業経営の規模を拡大するのではなく、研究開発も含めた幅広い分野で

多角的に持続可能な食料システムの構築に貢献していきたいと考えています。

経営者としての資質向上に集中

——サツマイモ栽培を始めたのはいつからですか。

大塚 父が20年ほど前に始めました。北海道ではサツマイモのはしりでした。現在は、「ベにはるか」「シルクスイート」などねっとり系の栽培が中心ですが、「ベニアズマ」などのほくほく系も含めて有機栽培しています。大半は干し芋にして全国に販売し、大手の量販店で有機食品コーナーなどに並んでいます。

北海道でサツマイモを栽培するメリットは病害虫が少ないとか、広い農地があることでしょうか。ただ、病害虫の侵入に警戒はしています。さらに温暖化が進めば本州から北海道に渡ってくるでしょう。

昨年、私たちが栽培するミニトマトで、トマトキバガの被害が出ました。発生したのは1棟だけでしたが、収穫量が減りました。有機栽培なのでローテーションとか、使用が認められている生物製剤などをうまく組み合わせて乗り切るしかありません。北海道でサツマイモを栽培するデメリットもあります。春先の気温が

なかなか上がらないため、どうしても苗の植え付けが遅れてしまう。逆に収穫時期は早めなので、栽培期間が短く関東などに比べると単位収量が見劣ります。

——経営者としての訓練を続けているそうですね。

大塚 これまで全国各地の優秀な農家を訪ねてアドバイスをもらってきました。作目などは異なっても経営者としての実践的な心構えなどは役に立っています。できればある程度の期間、海外の農家をじっくりと見て回りたい気持ちがあるのですが、経営を発展させるための仕事に追われて踏み切れていません。

今、力を入れているのが、一般社団法人アグリフューチャージャパンが運営するAFJ日本農業経営大学校の講座です。私が受講しているのは、農業経営者としての基礎的な知識や戦略づくりを実践的なケーススタディーで学び、フレームワークの手法などを使って資質を向上させるものです。

週に1回ペースで受講していて課題などもあるので、かなり時間が必要ですが、経営者としての判断を下すときには絶対に必要なスキルだと思います。集中して取り組んでいます。

(ジャーナリスト 山田 優)